

広報 Koho Gallery
展示室

第36回

— 秋季特別展 —

浮世絵風景版画の変遷展

浮世絵風景版画の歴史は、狩野派や大和絵の山水画の流れの一端として17世紀中葉から江戸で発達しましたが、浮世絵の主流の「役者絵」、「美人画」と同様に受け入れられるまでには多くの時間を要しました。「風景画」の市場の成立が遅れた理由は18世紀までは庶民の生活に余裕はなく、安全に街道の往来が出来なかったからです。

しかし江戸も中期以降になると太平の世を謳歌し、参勤交代により街道や宿場は整備され諸国と江戸の往来が活発になり、庶民も比較的安全に寺社に詣でる事が出来るようになりました。特に庶民文化が開花した文化・文政年間になると江戸の庶民は行楽や旅行に対し関心をもつようになります。版元はその好機を逃さず風景版画を開版します。特に葛飾北斎の「富嶽三十六景」は人物より風景を中心とした構図でそれ以前の風景画とは一線を画しました。この作品は36景で終わる予定でしたが好評により10枚追加され合計46枚揃いで完結しました。それだけ江戸で反響があったのでしょう。その後北斎に続けと広重、国芳、国貞、英泉など多くの絵師が風景画に挑戦し江戸名所、諸国名所、街道絵などさまざまな分野の風景画を描きました。

今回の展覧会は、浮世絵風景版画の歴史の中で



最も輝いた明和年間（1764～1772）から幕末までの作品を中心に紹介します。さまざまな絵師が制作した風景版画の変遷をご鑑賞下さい。

今回紹介する作品は、「長崎来航人湊之図」（大々判）個人蔵

長崎湾の全体を俯瞰した構図。湾内には唐船やオランダ船が停泊しています。湾の入り口にはオランダ船が幕府の小型舟に導かれながら入港しています。丁度、石火矢（大砲）の空砲を撃ち白煙を舞上げています。旗の立っている所が出島、左側が唐人荷物蔵でしょう。長崎絵の多くは地図のように描かれていますが、本図は3次元の立体的に描かれた珍しい作品です。

那珂川町馬頭広重美術館 学芸員 市川信也

【会期】

前期 9月20日（土）～10月19日（日）

後期 10月24日（金）～11月24日（月）

2008はな・花写真展

県内7会場を巡回し、県北展が馬頭広重美術館ギャラリーを会場に9月15日まで開催されている「2008はな・花展」。

105点の作品の中から、2点をご紹介します。

賛助出品
2008春の日
森山真弓先生



ミニ
ギャラリー



特別出品
故秋山庄太郎先生